

命のバトンをありがとう

堀口 七碧

今年8月の暑い日に親せきのおじいちゃんから昭和二十年におきた富山大空しゅうの話聞いたことがすごく印象に残りました。足元には、B二十九戦とう機による焼夷弾で数えきれない遺体が横たわっていました。おじいちゃんは恐怖も不安もない無の感情の中、ひたすら親せきの家を求めて歩いたそうです。その夜、眠りにつく時に目を閉じるとおじ

いちゃんのある言葉が頭の中に浮かんできました。「命があるのは当たり前じゃない。毎日感謝して生きるんだよ」と。そうだ、もしおじいちゃんがその時死んでしまったら今の私は存在していないのではないか。そう考えると恐ろしくて眠れませんでした。

おじいちゃんがあの空しゅうの日に大切な命を守り抜いてくれたからこそ家族や日常がある。そう考えると命とは自分のものだけではなく、たくさんの人の想いや、希望がつな

がって今ここにあるものなのではないかと感じました。

翌朝、お母さんに昨日の話と昨晚思ってたことを伝えました。お母さんは真剣に話を聞いてくれた後、私に「あなたは今日からどうするの」と問いました。私は、自分の命を大切にしたい、と伝えました。お母さんは、それを聞いて、笑顔で朝ごはんを出してくれました。

おじいちゃん、空しゅうの中、命を守ってくれて本当にありがとう。そしてこれからもう元気に長生きをしてください。

